



Title	ポパーの三世界論における知識の成長とは何か――世界3の知識からポパーの認識論を解く――
Author(s)	池田, 健人
Citation	大阪大学, 2025, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/101596
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 ＜a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed >大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 (池 田 健 人)

論文題名

ポパーの三世界論における知識の成長とは何か
——世界 3 の知識からポパーの認識論を解く——

論文内容の要旨

本論文では、世界 3 に成長する知識の概念を精査する仕方で、カール・ポパーの認識論に照準しながら、ポパーが提唱した三世界論の内実を検討し、その適切な解釈を明示する。三世界論とは、現実世界を、世界 1（物理世界）、世界 2（心理世界）、世界 3（人間精神の産物の世界）、という 3 つの部分領域に区別して把握しようとする理論である。ポパーの三世界論は、これまでさまざまに誤解されてきた。三世界論に対して向けられる批判のなかには、いまなお誤解にもとづいて展開されているものが散見される。本論文では、三世界論の誤解に由来した批判へ応答する。その目的は、三世界論を擁護することではなく、あくまでも三世界論へ帰せられてきた誤解を矯正することにある。このことを通じて、本論文では、三世界論の本義を闡明する。

その際、本論文では、知識の成長という概念が注目される。とくに、客観的知識の成長が主題となる。三世界論を横断的に精査するとき、客観的知識の成長に光を当てるのは都合がよい。客観的知識とは、世界 3 に属する言語化された知識のことである。ポパーによれば、客観的知識は成長する。客観的知識の成長とは、世界 2 との相互作用を通じて世界 3 の知識が発展する現象のことである。ここには、相互作用的な世界 2、また実在的な世界 3 という前提がある。客観的知識の成長を検討するためには、これらの前提もまた同時に検討されなければならない。それゆえ、三世界論を広く見渡すうえで、客観的知識の成長は好個の概念だといえる。

第二章では、ポパーの三世界論を概説する。ポパーは、物質と心（精神）のみを区別する従来の物心二元論に不備を指摘し、二元論ではなく多元論が標榜されなければならない、と訴えた。ここで不備だと指摘されているのは、精神の粗雑な分析である。ポパーによれば、精神の領域には、主観性の領域（世界 2）だけではなく客観性の領域、つまり人間精神の産物の世界（世界 3）がある。世界 3 は、抽象性や無時間性、自律性、実在性などにより特徴づけられる。

第三章では、ポパーの相互作用主義を検討する。客観的知識の成長を解明するにあたり、各世界の間にある相互作用の分析は避けられない。本章では、世界 3 と相互作用する世界 2 とは、いったいどのようなものかを検討する。このとき、世界 3 の実在性との関連でいえば、重要なのは世界 1 と世界 2 の相互作用である。本章では、むしろ世界 2（心）と世界 1（身体）の相互作用に着目し、心の主観性と実体性の観点から寄せられる批判へ対処する。

第四章では、ポパーの客観主義を吟味する。ポパーは、世界 3 を措定する客観主義を採用した。もし世界 3 が実在しないのなら、客観的知識の成長はありえない。本章では、はたして本当に世界 3 という客観性の領域は実在するのかを吟味する。ここで、焦点となるのは、批判という存在者の地位である。主観主義において、批判は世界 2 さえあれば十分に説明できる。本章では、世界 3 は実在しないという主観主義からの批判へ対処する。

第五章では、ポパーの三世界論における知識の成長を考察する。ここで、知識とは客観的知識のことである。本章では、ポパーの三世界論における知識、とくに客観的知識の成長という概念の内実を考察する。客観的知識の成長は、世界 3 に変化の余地がある場合にのみ達成されうる。しかし、可変性は世界 3 に含まれない、という見解がある。本章では、世界 3 の可変性へと向けられる、世界 3 の無時間性と自律性に依拠した批判へ対処する。

以上により、本論文では、相互作用主義、客観主義、知識の成長へと順に焦点を合わせつつ、客観的知識の成長という概念を精査することを通じて、ポパーの三世界論、とりわけ認識論に対する、ひとつの適切な解釈を明示する。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (池 田 健 人)		
	(職)	氏 名
論文審査担当者	主 査	教授 森田 邦久
	副 査	教授 野尻 英一
	副 査	学外委員 二瓶 真理子 (岩手大学人文社会科学部/准教授)

論文審査の結果の要旨

本学位申請論文では、世界3に成長する知識の概念を精査することにより、ポパーが提唱した三世界論の内実を検討し、その適切な解釈を明示することが試みられている。三世界論とは、現実世界を、世界1（物理世界）、世界2（心理世界）、世界3（人間精神の産物の世界）、という3つの部分領域に区別して把握しようとする理論である。申請者によると、ポパーの三世界論はこれまでさまざまに誤解されてきており、本論文は、そうした誤解に基づく批判に応える形で、難解で知られる三世界論を明確化しようとするユニークな試みとなっている。それゆえ、本論文の目的は、三世界論を擁護することにあるのではなく、あくまでも三世界論へ帰せられてきた誤解を矯正することにある。その際、本論文では、「知識の成長」という概念に注目しているが、特に客観的知識の成長が主題となる。客観的知識とは、世界3に属する言語化された知識のことである。ポパーによれば、客観的知識は自律的に成長するという。客観的知識の成長とは、世界2との相互作用を通じて世界3の知識が増大する現象のことである。ここには、相互作用的な世界2、また実在的な世界3という前提がある。客観的知識の成長を検討するためには、これらの前提もまた同時に検討されなければならない。

第二章は、ポパーの三世界論の概説となっている。やや文章が硬いが、ポパーの三世界論を申請者自身の言葉で体系的に再構築しており、申請者が一次文献をよく読み込んでいることが示されていると言えるだろう。特に本論文での議論で重要な点は、ポパーが、物質と心（精神）のみを区別する従来の物心二元論に不備を指摘し、二元論ではなく多元論が標榜されなければならない、と訴えた。ということである。ここで不備があると指摘されているのは、「精神」の粗雑な分析である。ポパーによれば、精神の領域には、主観性の領域（世界2）だけではなく客観性の領域、つまり人間精神の産物の世界（世界3）があるということで、これこそが彼の三世界論のアイデアを支えるものである。世界3は、抽象性や無時間性、自律性、実在性などにより特徴づけられる。

第三章では、ポパーの（各世界間の）相互作用主義が検討される。客観的知識の成長を解明するにあたり、各世界の間にある相互作用の分析は避けられない。本章では、世界3と相互作用する世界2とは、いったいどのようなものかを検討する。このとき、世界3の実在性との関連でいえば、重要なのは世界1と世界2の相互作用である。本章では、むしろ世界2（心）と世界1（身体）の相互作用に着目し、心の主観性と実体性の観点から寄せられる批判へ対処する。

第四章では、ポパーの客観主義が吟味される。ポパーは、世界3を措定する客観主義を採用した。もし世界3が実在しないのなら、客観的知識の成長はありえない。本章では、はたして本当に世界3という客観性の領域は実在するのかを吟味する。ここで、焦点となるのは、「批判」の地位である。主観主義において、批判は世界2さえあれば十分に説明できる。本章では、世界3は実在しないという主観主義からの批判へ対処する。

第五章では、ポパーの三世界論における知識の成長を考察する。ここで、知識とは客観的知識のことである。本章では、ポパーの三世界論における知識、とくに客観的知識の成長という概念の内実を考察する。客観的知識の成長は、世界3に変化の余地がある場合にのみ達成されうる。しかし、可変性は世界3に含まれない、という見解がある。本章では、世界3の可変性へと向けられる、世界3の無時間性と自律性に依拠した批判へ対処する。

ポパーの三世界論はその難解さゆえ、いまだに誤解が多い理論であるが、本論文は、そうした誤解に基づく批判に対して、ポパーのテキストに内在しつつ丁寧に応答し、ポパー研究に対する重要な寄与をなすものであると評価できる。それゆえ、審査の結果、本論文は博士（人間科学）の学位を授与するに相応しいと判定した。